

漫画家

ヤマザキマリ

Mari Yamazaki

古代ローマの浴場設計技師ルシウスが現代日本にタイムスリップする——
奇想天外な発想とリアルな描写で爆発的なヒットとなり、映画化もされた漫画『テルマエ・ロマエ』の作者・ヤマザキマリ氏。一七歳で日本を飛び出した彼女が見た、今の日本人の姿とは？ そして、古代ローマ皇帝ハドリアヌスや現在執筆中の『ステイプ・ジヨブズ』ら、時代からはみ出した人物の魅力とは？ バーチャルな世界を脱し、自ら体験する勇気の大切さを説く。



「オリジナルな辞書」をもて

バーチャルな世界を脱し、自ら体験する勇気を

おおらかだった古代ローマ人

——ヤマザキさんの作品『テルマエ・ロマエ』は、古代ローマの人々の魅力がとてもよく伝わってきます。この作品を描き始めたきっかけを教えてください。

ヤマザキ 古代ローマは、政治文化等、様々な面で現代に大きな影響を与えていて、そうした本も多く出ていますが、その中で古代ローマの人々に着目して、その魅力を私なりに描けないかな、という思いがありました。

もうひとつ、本音を言えば、私は無類の銭湯好きなのです(笑)。小さい頃、内風呂があったのです

が、祖父母に連れられて銭湯に行くのが大好きでした。銭湯では祖母が友人たちと楽しげにおしゃべりしたり囲碁を打ったり、交流しているのを見ているのもうれしかったです。だから、大の銭湯好きでありながら、長年外国生活でシャワーしか使えなかった私にとって、古代ローマの浴場跡は、見るたびに「この浴場が使えたら私も入れたのに」との思いに駆られる存在だったのです。いわば、

生活の枯渇感から生まれたのがあの作品といっても良いでしょうね。

——日本と古代ローマのお風呂

文化はよく似ていますね。

ヤマザキ 古代ローマ人にとって

お風呂は「くつろぎの場所」、日本の銭湯文化と同じです。古代ローマ人にとっても浴場は社交の場でした。

ちなみに、古代ローマ人は多神教で、属州が増えるにつれ、それぞれの地域の神々を排除せず受け入れるなど、八百万やおよぞうの神々が住まう日本と同じような大らかな宗教

観、倫理観を持っていました。そのせいか、江戸時代の銭湯同様、

古代ローマでは混浴が許されていません。

——それは初めて知りました。

ヤマザキ 『テルマエ・ロマエ』で描いた皇帝ハドリアヌス(在位一一七―一三八年)の時代になつてなくなつたのですが、それまでは、江戸時代の銭湯と変わらなかつたようです。

周りから理解されない「知性の皇帝」ハドリアヌス

——ところで、主人公ルシウスは、古代ローマから現代日本という異次元の世界へ来たのに、

シヨックも受けずに好奇心を持って、これは何だろう、自分のものにしよう、とする。この貪欲さ、



やまざき・まり●1967年生まれ、東京都出身。14歳で独・仏を一人旅。17歳のときに単身でイタリアへ渡り、フィレンツェの美術学校で油絵を学ぶ。27歳でシングルマザーとなったのち、30歳で講談社の新人オーディションに合格し、漫画家デビュー。35歳のときにイタリア人研究者と結婚。エジプト、シリア、ポルトガル、アメリカを経て現在はイタリア在住。漫画作品に『テルマエ・ロマエ』（エンターブレイン）、『スティーブ・ジョブズ』（講談社）、エッセイに『男性論』（文春新書）、『望遠ニッポン見聞録』（幻冬舎）など多数の作品を発表している。

精神の強さは、滑稽ながらもすごいなと感じました。

ヤマザキ ルシウスは、古代ローマの誇りをしょって立っている人なので、それが強さの源泉です。ただ、全真自分より低い人間なので、文化ももらって当然という意識なので、現代日本人（平たい顔族）の文化にはどこかで負けそうになっている、その辺の葛藤が滑稽で描き応えがありましたね。

——一方で、同じく『テルマエ・ロマエ』の重要人物として登場し

てくる皇帝ハドリアヌス。彼は別荘に一人籠もるようなシーンもありましたが、どんな人物だったのでしょうか。

ヤマザキ ハドリアヌスは今でこそ「五賢帝」の一人とされており、私は「知性の皇帝」とも呼んでいますが、当時の評判は最悪でした。当時のローマ市民は「領土拡張こそ善」と考えていましたが、彼は拡張された領土の一部から撤退してしまつたのです。そのため彼が亡くなった時、当時の元老院からは、彼を記憶抹殺扱いにすべ

きとの意見が出たほどです。

しかし一方では、属州を丹念に訪ねて各部族にローマ市民権を与えたり和解を図るなど、領土の保全を重視した政策を進めました。実は彼の政策こそがその後のローマ帝国の繁栄の基礎となったのです。

また彼は、芸術や哲学にも造詣

が深く、建築家としてもギリシャ様式を超えたドーム建築のパンテオンを設計・建設するほどの技術を持っていました。パンテオンは、ローマ建築の代表作の一つで、今でも建築専攻の学生が必ず学ぶ程度の完成度の高さです。彼は、当時の人には理解されにくかったけれど、本当の天才でした。

異質な人間を受け入れる寛容さが天才を生かす

——お話を伺っていると、ハドリアヌスは、「周りから理解されない天才」。今ご執筆になっている作品（注）の主人公スティーブ・ジョブズと重なるイメージがありますね。

ヤマザキ 似ていると思います。ジョブズは、本能がもたらす人間的な感覚、いわばアナログ脳と、論理やデータによってその感覚を具体的なものとして構築できるデジタル脳の両者を兼ね備えた天才でした。しかし、ジョブズは、若いときインドを放浪し、ヒッピーカルチャーに傾倒。その性格は独善的、独裁的で、周囲とは常に摩

擦を起こす。ハドリアヌス以上に扱いづらい人間だったと思います。

そうした特異な人物がアップルを築き上げるには、彼の特異さをどう受け止めるかという、周囲の寛容さが非常に大事なポイントでした。

日本だったら、ジョブズはまさに村八分になりそうな人物です。しかし、アメリカには、変だから「排除する」のではなく、「ちょっと様子を見てみよう」と受け止める寛容さ、戸惑わない心構えがありました。そこがアメリカの強みであり、また属州

の習慣や神々を排除しなかった古代ローマにも通じる部分だと思えます。

(注) 『ステイプ・ジョブズ』(講談社)は、世界的なベストセラーとなった、アップル創業者ジョブズ公認の伝記(ウォルター・アイザックソン著)を漫画化したもの。

日本人ならではの純粋な好奇心

——日本人と古代ローマ人の宗教的な寛容さは似ているものの、両者には違いもありそうですね。

ヤマザキ 寛容さの前提として好奇心の違いがあるように思います。

江戸後期に日本を訪れた欧米人たちの多くが日本人の天真爛漫な「子供らしさ」について記録に残しています。「子供らしさ」というのは、子供のような無邪気な好奇心を持っていたということだと思います。未知のものを見てみたい、取り入れたいという、純粋な好奇心です。これは、遣隋使、遣唐使の例にも表れているように、苦労してでも外の文化を手に入れたいという、島国であるが故の枯渴感と言っても良いでしょう。これが日本人の寛容さを支えているように思います。

こうしたメンタリティーは現代でも生きています。外国のミュージシャンの多くは、よく「日本人

が大好き。日本ツアーは楽しみ」と言います。ツアーで外国を回ると、「お金を払っているのだから」と相当働かされるわけですが、日本に来ると、皆親切で腰が低く大歓迎してくれるわけです。

一方で、古代ローマ人の好奇心は違います。世界は広いのだからいろいろなものを積極的に受け入れようという、ある種の自信に裏付けられた好奇心なのだと思います。泣く子も黙る古代ローマ帝国、どんなものが入ってきても動じる

——確かに純粋な好奇心は強みでしょうが、課題もあるかと思えます。ヤマザキさんから見ると、日本人は「ここは変えた方が良く」と感じるところはありますか。

ヤマザキ 日々、そういうことを

ことは無い、という非常に強いプライド、自尊心です。

——日本は、海に囲まれ、孤立している一方で、存立自体は安定している。それが故に、純粋な好奇心で動けるといふことでしょうか。そしていったん存立が危うくなれば村八分のように拒絶する……。

ヤマザキ そうですね。そして純粋であるがゆえに日本は物凄い力を持ったガラパゴス諸島にもなっていると思います。例えば、イギリスが発明した蒸気機関車を進化させて、世界で最も早い時期に新幹線を作ったり、トイレも、あつという間に和式から美しい温水洗浄便座にしてしまう(笑)。

バーチャルな世界を脱して、自ら体験する勇気を

感じますね。例えば、総務省が提唱した「独創的な人向け特別枠」。この企画自体の是非は別として、「和製ステイプ・ジョブズの育成を目指す」という形で報じられて話題になりました。

『テルマエ・ロマエ』は、現代日本にタイムスリップし、その風呂文化に衝撃を受けた古代ローマの浴場設計技師ルシウスが、現代日本のアイデアを持ち帰り斬新な浴場を造り出すコメディ。累計900万部を突破し、2010年手塚治虫文化賞短編賞を受賞。2014年4月に映画化第2弾が公開された。



しかし、ステイプ・ジョブズは育てて作れるものではありません。ジョブズはアナログ脳と、デジタル脳の両者を兼ね備えた天才でしたが、こうした天才はマニュアルで育てられるものではありません。日本人はつい何か既成のものに頼りたくなりますが、天才は、いつ噴火するか分からない富士山のようなものです。自然の摂理を大切にして、どっしり構え、天才の出現を待つくらいがちょうど良いと思います。

——日本人は心配性でつい手を



かけようとしてしまうということが課題ですね。

ヤマザキ いつも帰国した時に感じるのですが、日本のメディアには知的教養心を刺激するようなものが少ないですね。テレビのバラエティ番組はすべてテロップが入るなど、メディアの説明が多すぎて、受け手が自ら考えて化学変化を起こすような楽しみ方ができない作りになっています。

例えば、一人旅番組。かつて私が大好きな兼高かおるさんの「世界の旅」(一九五九—一九〇年TBS系で放送)がありました。女性一人でどんな国にも行って、どんなものも受け入れる兼高さんは、

まるで動く古代ローマのようなイメージです。それでいて番組は、氷山の一角を見せるだけなので、私たち視聴者はそこに他の情報を織り交ぜながら、自分で夢や想像力を膨らましていました。

それに対して、今の旅番組は、視聴者を一人旅させた気分にはするけれど、自分で一人旅をしようとは思わせない。本当は、一人旅をするときぐくエネルギーが要ります。お金も使うし、勇気も必要、危険も伴う。現地の人とのコミュニケーションも難しい。でもこうした苦労を全部隠してスマートに見せる番組が多い。「いいんだよ、

オリジナルな辞書をもて

——『男性論』で「オリジナルな辞書をもって、外に出よ」と書かれています。あの言葉は非常に深い意味を感じます。自分の体験をしっかりと自分の辞書に刻み込んで、それを生かしていくということとは大切なことですね。

ヤマザキ 肉体的な苦労のみならず、精神的な苦労も含め、自分の中の辞書に経験として刻んでおく

外へ出なくても。この国にいれば全部事足りるから」と言っているように感じます。ひきこもりのですね。

——バーチャルな海外が作られてしまっているわけですね。

ヤマザキ 何でもそうです。今の日本は、本やテレビ、さらにネットといったバーチャルなもので足りるようにしていて、自ら足を踏み出す勇氣が育ちにくい環境になっていきます。海を乗り越えていけばそこでもまったく新しいものが生まれるかもしれないのに、その機会を逃してしまっているのは悲しいですね。

と、いつか必ずそれが助けとなります。理詰めではどうにもならない部分は体を張って経験していくしかありません。

——海外で苦勞されてきたヤマザキさんだからこそ、その言葉の重みが伝わってきます。

ヤマザキ 今だから言えますが、海外生活中は、要所要所で泣いていました。でも、それでいいんで

す。合理性を重視して、なるべく泣く目に遭わないようにしようとすると、それがずっと弱みになってしまふ。やってみたら「意外に自分は凄いいじゃん」と気付くこともあるんです。経験してみることができ得られないことは多いと思います。

——最後に、ヤマザキさんが『テルマエ・ロマエ』の主人公のように突然古代ローマにタイムスリップして、何か一つだけ持ち帰っていいと言われたら何を帰りますか。

ヤマザキ うーん、当時の高度な技術を駆使したもの、例えば当時外科手術で用いられていた鉗子かんしなんかいいですね。実は博物館に行けば今でも見られますが、その前で一時間ぐらいたたずんではない。古代ローマがどれくらい進んでいたか想像すると、世界がどんなに広がります。

——やはり山崎さんはルシウスのように好奇心旺盛ですね。本日は興味深いお話をありがとうございました。

(聞き手／情報サービス局長・丹治芳樹)